

## 研究・技術報告

### 瀬戸臨海実験所に関する文献

原 田 英 司

#### References dealing with the Seto Marine Biological Laboratory

Eiji Harada

当瀬戸臨海実験所を紹介した報文や記事は、これまでに多数公にされていて、往時の実験所の様子を教えてくれる。勿論、実験所に残された各種の文書や議事録、図面、写真からはもっと詳細な状況を読み取ることもできるし、開所式に先立つ1922年7月13日から断続的にはあるが誌されている瀬戸臨海実験所日誌（実習日誌）は人々の生の表情や振舞いを伝えている。京都大学職員録や Kyoto University Bulletin, 学事要項などを繰ってみれば、人々の動きの公の面を追うこともできる。更に、新聞等の記事を探せば、外から眺められた姿を窺い知ることができる。しかしながら、このような所内資料を通覧したり新聞記事を集めたりするのはなかなか煩瑣な仕事で、特別の目的をもって調べるのでもない限り、歴史や状況のあらましを確かめようとするには、やはりある程度まとまった記述や資料がよい。そうしたものにどんなものがあるか、よく知られていないところもあるので、それらに接触する道を残す意味で、この機会にまとめてみた。ここに示す一覧も完全ではないであろうが、これによってむしろ欠けている文献を収録する糸口になればと思う。文献は、課題、発表年、著者または編集者または発行者、掲載雑誌名または発行所名、巻号およびページと図表数、の順に記し、発表年順に並べた。

- 『The Seto Marine Biological Laboratory of the Kyoto Imperial University, its equipment and activities, with remarks on the fauna and flora of environs』  
1927. Komai, T., Akatsuka, K. & Ikari, J. Mem. Coll. Sci., Kyoto Imp. Univ., Ser. B, Vol.3, pp.281-306, Pl. XII.
- 『京都帝国大学理学部附属瀬戸臨海研究所』  
1928. 駒井 卓. 理科教育, 第11巻第6号, 1-10ページ.
- 『京都帝国大学理学部瀬戸臨海研究所』  
1929. 駒井 卓. 京都帝国大学理学部瀬戸臨海研究所, 1-21ページ, 11図.
- 『The Seto Marine Biological Laboratory of the Kyoto Imperial University. Its equipment and activities, with remarks on the fauna and flora of its environs. (A revised article)』  
1929. Komai, T. & Ikari, J. Rec. Oceanogr. Works in Japan, Vol.1, No.3, pp. 113-129, Pls. XXVII-XXXV.
- 『瀬戸臨海研究所』  
1930. 駒井 卓. 生物学叢話, 改造社, 33-51ページ, 1図.
- 『京都帝国大学理学部瀬戸臨海実験所（附水族館）』  
1939. 駒井 卓 (編). 瀬戸臨海実験所事務室, 1-23ページ, 16図.

『瀬戸臨海実験所』

1943. 京都帝国大学. 京都帝国大学史,  
958-961ページ.

『The Seto Marine Biological Laboratory  
of Kyoto University』

1952. Miyadi, D. & Utinomi, H. Publ.  
Seto Mar. Biol. Lab., Vol.2, No.2, pp.41  
-52, Pls. II-V.

『研究施設めぐり—瀬戸臨海実験所』

1966. 内海富士夫. 京都大学教養部報, 10  
号, 2ページ.

『瀬戸臨海実験所』

1967. 京都大学七十年史編集委員会 (編).  
京都大学七十年史, 500-504ページ.

『京都大学理学部瀬戸臨海実験所要覧』

1968. 瀬戸臨海実験所. 1-4ページ.

『Guide to the Seto Marine Biological La-  
boratory and the Sirahama Aquarium,  
Kyoto University』

1968. 瀬戸臨海実験所. 1-6ページ, 1図.

『京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所島島実  
験地』

1969. 瀬戸臨海実験所, 1-12ページ.

『Hatakezima Island will successfully be  
conserved for marine biological research-  
es』

1969. Tokioka, T. Publ. Seto Mar. Biol.  
Lab., Vol.17, No.1, pp.1-6.

『瀬戸臨海実験所五十年史1922-1972』

1972. 京都大学理学部附属瀬戸臨海実験  
所創立五十周年記念事業実行委員会. 京都  
大学理学部附属瀬戸臨海実験所, i-ii+1-23  
ページ, 2図.

『京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所』

1972. 国立大学臨海臨湖実験所長会議.  
国立大学臨海臨湖実験所要覧, 49-52ペー  
ジ.

『京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所』

1976. 国立大学臨海臨湖実験所長会議.  
国立大学臨海臨湖実験所要覧, 49-52ペー

ジ.

『京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所』

1980. 国立大学臨海臨湖実験所長会議.  
国立大学臨海臨湖実験所要覧, 49-52ペー  
ジ.

『研究所だより—瀬戸臨海実験所今昔』

1982. 原田英司. 京都大学教養部報, 第121  
号, 3-5ページ.

『京都大学理学部附属臨海実験所』

1983. 瀬戸臨海実験所. 1-7ページ.

『白浜水族館「磯の生物水槽」の紹介』

1983. 荒賀忠一. アニマ, 第125号, 22-24  
ページ.

『京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所』

1984. 国立大学臨海臨湖実験所長会議.  
国立大学臨海臨湖実験所要覧, 49-52ペー  
ジ.

『Seto Marine Biological Laboratory, Fa-  
culty of Science, Kyoto University』

1985. Director Council of the Japanese  
National Marine and Inland Water Bio-  
logical Stations. National Marine and  
Inland Water Biological Stations in Ja-  
pan, 1985 Edition, pp.25-27.

『白浜水族館の紹介』

1985. 荒賀忠一. 動物と自然, 第15巻第7  
号, 30-31ページ.

余談に亘るが、これらのうちのいくつかに  
ついて、二、三触れておこう。

Komai ほか (1927) による報文は、公に  
瀬戸臨海実験所を紹介した最初のもので、  
その表題の示すとおり、実験所の立地、  
建物、設備の説明に続いて、周辺の海洋生物  
についての記述が12ページにわたってなさ  
れている。沿岸動物、浮遊動物、浮遊植物、  
海藻にわけて、分類群ごとに記してあるが、  
特に海藻についての詳しさが目を惹く。中  
には当時としては止むを得ない誤りや不正  
確な点もあり、こうした初期の記録の常  
で、参照するにあたっては当然の注意を  
払わねばなら

ない。イセエビの近縁の種として *Panulirus fasciatus* という学名を挙げているが、これはゴシキエビ (*Panulirus versicolor*) のことである。カノコイセエビ (*Panulirus longipes*) がその地位を確定するのは1950年以降 (Kubo, 1954; George & Holthuis, 1965) のことであり、この比較的多かったはずの種は記録されていない。*Scyllarus haani* はコブセミエビ (*Scyllarides haanii*) のことであるが、後の和文の記事にはセミエビという和名が出てくるから、これは普通のセミエビ (*Scyllarides squamosus*) のことと思われる。*Paribacus ciliatus* も、後の記事にウチワエビという名が出るから、ゾウリエビ (*Parribacus antarcticus*) ではなくウチワエビ (*Ibacus ciliatus*) のことと判断すべきであるが、イセエビ、セミエビなどとともに漁獲されるのはゾウリエビであり、ウチワエビは沖合で底曳網で漁獲されるもので白浜の瀬戸漁港などには普通水揚げされないから、ゾウリエビのことをウチワエビと記したとの疑いも残る。常に見られる浮遊幼生としてフィロゾーマ (イセエビ類の幼生) も挙げられているのは筆が滑ったというところであろう。この点は、Komai & Ikari (1929) の報文では普通に見られると記述が改められているが、本当に当時はよく採集されたのかなと思う。なお、駒井卓初代所長は、『田辺町誌』にも田辺湾周辺の海産生物についての解説記事を残している。

『和歌山県田辺町誌』田辺湾近海の生物、田辺町、1930。

実験所周辺海域の特産種で最重要種ともいふべきイラモは、この1927-1929年の段階では *Stephanoscyphus* sp. として、種名を与えられないで登場する。駒井 (1936) はイラモ発見の経緯について次のように書いている。

「*Stephanoscyphus* は囊水母類の *Nausithoë* の水螅時代である。……とこ

ろがこの *Stephanoscyphus* は従来よほど珍しい者とされて居た。……ところが京都帝大の臨海研究所のある和歌山県瀬戸の海岸には浅い処に此 *Stephanoscyphus* が沢山ある。之は今より凡そ14年前此処に研究所の出来た直後に確め得た事である。此年の夏私共は臨海実習に行ったのであるが、其際土地の人から其付近にひどく刺す藻の様な者があって、漁夫等が恐れてをると云ふ事を聞いた。そこでそれを取寄せて見た処、見馴れぬ者で、最初何か分らなかった。若干の手数を経た後、漸く之が *Stephanoscyphus* だと分った。」(動物学雑誌、第48巻)。

この記事を書いた直前に、駒井卓先生は、*Stephanoscyphus racemosus* という学名を与えて、イラモを新種として発表している (Komai, 1936, Mem. Coll. Sci., Kyoto Imp. Univ., Ser. B, Vol.11)。これの模式標本はすくなくとも実験所には残されていない。記載のされ方から推測して、それを指定して保存するというような手続きはなされなかったのではなかろうかと思われる。しかし、どの磯の何処とは言えぬまでも、実験所周辺海域が模式産地であることは間違いなかろう。

Komai ほか (1927) の報文には、建物の配置図や各建物の間取図とともに9葉の写真が添えられている。これらの図や写真はほとんどそのまま後の駒井 (1928)、駒井 (1929) および Komai & Ikari (1929) の報文に再録されており、写真は実験所保存の記録写真集にも残されている。ただし、写真版 (Plate XII) の第4図が「Students' Laboratory」(学生実習室) と説明されているのは誤りであって、これらの図や写真を比較して仔細に検討すると、これは水槽室の写真であることが判る。駒井 (1929) の報文の図では、特別研究室に早々と改造が施されて、現在のように、元の居間を廊下と2つの小室に分かっ

ていたことが示されている。これらの写真を撮影したときの状況を伝える記事が実験所日誌に残されているので、紹介しておこう。1925年7月29日（水）付のものである。

「朝 Plankton 例ノ通り、田辺ヨリ写真師来ル。コレハ駒井先生ガ当臨海研究所ヲ欧文ニテ世ニ紹介セラレルタメソレニ必要ナノdeal。裏ノ山ニ登ッテ俯瞰シタ所ヲトッタリシタ後、各建物及室内ヲトル。実験室デ我々ガヒザラガヒヨツツイテヨル所ヲ写シタ。黒板ニハ晴山先生ノ文字デ chalk ノ色鮮カニ “*Liolophura japonica* Lischke” トカ、レ、上ニ掛図ヲ掲ゲタ。Vertical plankton net ヲ鯉ノ吹キナガシヨロシクノ態デ天井カラブラ下ゲタ所ニハ俗人ノ裝飾本性ガ遺憾ナク發揮セラレテヨルガムシロコレハ愛嬌トイハネバナナルマイ。」

入来重盛氏の筆になるものと思われる。このヒザラガヒの解剖の実習風景の写真はどの報文にも掲載されていないが、記録写真集には残っており、またその際に使われた掛図も今尚健在である。

駒井(編)(1939)の報文には、簡単な沿革と業績目録および水族館の解説が加えられている。そこで

「元来この水族館は実験所に於ける研究用動物の飼育用に造られ、……設備等の点で不十分な点あるは止むを得ない。然し観覧者側に於いて研究的態度を以って観るなら、得る処は諸地方の観覧用水族館に優るものたる事疑ひない。」

と述べられた水族館は、年中無休で一般公衆10銭学生生徒5銭、飼養動物は無脊椎動物100種脊椎動物50種とある。図や写真に示された建物の構造および配置には、かなりの改増築があったことが認められる。Miyadi & Utinomi (1952)の報文になると、さらに手を加えられた建物とその配置が示されている。1946年12月に南海大地震によって被害

を受けたあと応急修復がされたとは言え、なお創立当初の面影を留めていたと思われるが、これが木造赤屋根時代の最後の姿となった。以後は、1962年の第4水槽室を皮切りにコンクリート造りの建物が増して行くことになる。この報文には、簡単な年譜、在職者名のほかに、臨海実習実施数および参加学生数、外来研究者数、受入外国雑誌等一覧表が掲載されている。

『島実験地』および Tokioka (1969)の報文は、いうまでもなく、1968年12月に国費買上によって取得して実験地とした島島について記述したものである。いずれも島島の海洋生物に主眼を置いて書かれている。前者には島島に関する主要文献目録が添えられている。島島をはじめ田辺湾、白浜沿岸の海洋生物と関係文献は、時岡隆元所長および山本虎夫氏の手になる次の文献にも詳しくまとめて解説されている。

『白浜町誌自然編白浜の自然』第3編海の生物、白浜町、1982。

『瀬戸臨海実験所五十年史1922—1972』や、京都大学七十年史および京都帝国大学史の『瀬戸臨海実験所』は、いずれもその時点までの実験所の歴史を要領よくまとめたものである。ただし、記述されている事柄には多少の違いがあるので、後に出されたものを読めば全て知れるというわけにはゆかない。それでも、『瀬戸臨海実験所五十年史1922—1972』は最も詳しく、なによりも実験所員自らが見聞した事を自分の手で識し残そうとし、時々の人々の姿が伝わって来るのがよい。実験所の立地や開設にまつわる地方的叙述もされているが、この点に関連しては、次の文献が参考になろう。

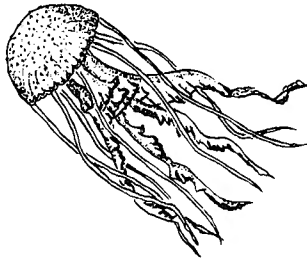
『瀬戸鉛山村の日記』、白浜町誌編纂委員会、1968。

『白浜温泉史』、白浜町役場観光課、1961。

国立大学臨海臨湖実験所要覧に収録された記事は、外来研究者の利用案内になるように、

その時々の実験所の建物，設備，人員を示している。1983年，研究教育棟と学生宿泊棟の改築完成を機に作った要覧『京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所』に記述されたところは，ほぼ現状である。保存建物として残すことになった特別研究室と旧状のままの工作室

およびウインチ室，ならびに職員宿舍1号および2号を除いて，木造赤屋根の建物は消え失せてしまった。昔を知る人からは昔を懐しむ声が聞こえそうな現在の姿は，この年報の所々に示されているとおりである。





本館北側（実習室・講義室）



船舶（寒サ浦にて）